

(2) 日米南戦直前ノ経過ト若干ノ觀察

7700-13 70

REEL No. A-1076

0330

アジア歴史資料センター

政一課 3/10
A700.9

日米開戦直前ノ經過ト若干ノ觀察
日米開戦ニ至ル外交上及軍事上ノ經過ニ關シ調査セル所ヲ綜合スル
ニ左ノ通りナリ

一事實

昭和十六年七月十八日第三次近衛内閣成立後二日ニシテ我軍ノ南
部佛印進駐ヲ見更ニ數日ヲ出テヌシテ資産凍結令ノ發出トナレル
カ日米間ノ緊張セル局面打開ノ爲我方ニ於テハ日米首腦者會見方
提案シ豫備的大綱的見解合致點ヲ見出シタル上兩國首腦者會談ヲ
行ヒ其ノ締括リトシテ共同聲明ヲ發出シテ雰囲気ノ好轉ヲ圖ラン
トノ方針ニテ交渉ニ努メタルモ遂ニ局面轉換ノ曙光ヲ見ヌ近衛内
閣總辭職シ十月十八日東條内閣成立ス新内閣ニ於テハ白紙ニ還リ
テ交渉ヲ再檢討シ平和裡ニ收拾方 陛下ノ御思召アリタルヲ體シ

(昭和二〇・一〇)

S 1.7.0.0-13

71

慎重ニ根本國策ヲ検討シタル結果十一月五日甲乙二個ノ妥結案ヲ
決定セリ即チ甲案ハ日獨伊三國同盟・支那及佛印ヨリノ撤兵問題
及通商問題ヲ中心トスル我方最後案又乙案ハ暫定協定ニ依リ資産
凍結以前ノ状態ニ引戻サントスルモノナリ先ツ甲案ヲ以テ交渉ノ
進捗ヲ圖ラントシ野村大使ヲ援助ノ爲同日來檜大使ヲ華府ヘ出發
セシメタルガ一方大本營モ同日御裁可ヲ仰キ萬一ノ場合ニ具ヘ作
戰準備ヲ下命シ之ト共ニ軍令部總長ヨリ對四ヶ國作戰計畫大綱ヲ
開戦已ムナキニ立到リタル場合ニ處スヘキ帝國海軍作戰方針トシ
テ指示シ次テ十一月七日聯合艦隊司令長官ヨリ戰鬪部隊ノ單冠灣
集結方發令セリ

然ルニ前記甲案ヲ以テスル交渉モ意ノ如ク進捗ヲ見サリシニ因リ
十一月二十日乙案即チ暫定協定案ヲ提示シテ之カ妥結ニ努メシメ
タルカ之亦進捗セヌ仍テ大本營海軍部ニ於テハ十一月二十一日開

S 1.7.0.0-13

72

戰不可避ノ惧レ大ナル情勢トナレルモノト認メ御裁可ヲ仰キ交渉
成立セハ歸還スヘキ旨ノ條件ヲ附シタル兵力ノ準備的展開命令ヲ
下シ次テ二十五日聯合艦隊司令長官ヨリ機動部隊ハ二十六日ヲ期
シテ單冠灣ヲ發シ布哇北方海域ヘ向フヘキ旨及攻撃日時ヘ後命ヲ
待ツヘキ旨竝ニ日米交渉成立セハ即時歸還スヘキ旨ノ命令ヲ發セ
リ右進發期日ト同日ニ米國政府ハ我方從前ノ立場ト相容レサル數
點ヲ要求セル所謂「十一月二十六日案」ヲ提示越セルニ依リ慎重
審議ヲ重メタル上斯ル情勢ニ於テハ交渉妥結殆ト不可能ナリト認
メツツモ尙米國ノ翻意ニ依ル一縷ノ望ヲ捨テサルノ建前ヲ以テ十
二月一日閣議及御前會議ニ於テ開戰ヲ決定シタルガ之ニ依リ大本
營ハ御裁可ヲ仰キ聯合艦隊司令長官ニ對シ後令時期以後在東洋敵
艦隊ノ擊滅並ニ敵艦隊東洋方面ニ來航セハ之ヲ邀擊擊滅スヘキ旨
ノ命令發出セラレ十二月二日御裁可ヲ仰キ大本營海軍部ヨリ聯合

艦隊司令長官ニ對シ十二月八日ヲ以テ米、英、蘭ニ對シ武力ヲ行
使スヘキ旨及右時期迄ニ日米交渉成立セハ即時歸還集結スヘキ旨
ヲ決定シ之ヲ華府時間十二月五日日米交渉打切りニ關スル對米通牒
メタルモ技術上ノ手違ヒニ因リ一時間以上遲レテ通告セラレ眞珠
灣ニ對スル強襲ハ右通告ニ先行スルノ結果トナレリ十二月八日臨
時閣議後樞密院會議ニ於テ政府側ヨリ宣戰ノ御詔勅案ヲ附シテ開
戰ニ至レル經緯ヲ説明シ諒承ヲ得同日午前十一時三十分宣戰ノ御
詔勅發アラセラレタリ

以上ノ経緯ニ鑑ミルニ外交交渉ニ於ケル政府ノ最後案及外交交渉ニ最善ヲ盡スモ結實セサル場合ノ統帥部ノ豫備的具體的心構ヘ一攻撃個所ニ眞珠灣ヲ含ミタル作戰大綱ハ十一月五日ヲ峠トシテ確立シタルモノト見ルヘク國務統帥兩部面ヲ綜合スルニ右以後ニ於テハ依然外交交渉ニ第一義的性質ヲ置キタルモ米側ノ讓歩ニ期待シ得サル形勢顯著トナリ結局戦争ハヒムヲ得サルハ勢ニ非ラズヤトノ氣持ハ十一月中頃ヨリ逐次抬頭シツツアリキリト見ルヘク而シテ米側ノ「十一月二十六日案」ハ之ニ拍車ヲ掛ケ遂ニ十二月一日ノ御前會議ヲ經テ米側ノ觀意ニ一縷ノ望ミヲ繋ギツツモ開戦ノ意志正式ニ決定セララルニ至リタルモノニシテ從テ十二月八日ノ樞密院本會議モ開戦ノ決定諒承ノ爲ノ會議トナリ之カ開催ノ時期モ亦交戦後トナリ居レリ

外交交渉ノ狀況推移ニ並行シ統帥部ノ執レル措置ヲ檢スルニ既ニ十一月五日ニハ作戰準備下令アリ十一月二十五日ニハ待機海面ハ進發方發令セラレ居リ此等事實ハ政府當局ノ知ラサリシ所ナルモ斯クノ如ク外交交渉ト戰團準備カ並行セルハ當時ノ事情トシテハ劣勢國カ優勢國ニ對シ勝利ヲ得ンニハ相手國ノ軍力ノ本據ヲ一擊ニ衝ク以外ニ道ナシト見解ヨリ眞珠灣ニ關シテモ集結中ノ米國艦隊ヲ攻撃シテ大打撃ヲ與ヘントノ作戰ノ必成ヲ期シタルカ爲ノヒムヲ得サル事態ナリシモノト認メラル(眞珠灣ニ關シテハ遠距離等ノ關係ヨリ相當前廣ニ諸般ノ準備ヲ完整シ置キ外交交渉安結ニ至レリトノ通報ナキ場合ハ何時ニテモ命令ノ時期ニ間髪ヲ容レス攻撃ニ移リ得ル様統帥部ニ於テ考慮シタルモノト認メラル)然レトモ右關係大本營命令ニ常ニ日米交渉成立セハ即時引返シテ終結スヘキ旨不絶念ヲ押サレ居リタルニ鑑ミ我方カ外交交渉ヲ無

視シテ米側ヲ驥シ討チニセント企テタルニ非ラサル事明白ナルノ
ミナラス愈々外交交渉ノ妥結絶望トナレル際モ政府ハ交渉打切
リノ最後の通牒カ爲サレタル後ニアラサレハ攻撃ヲ加ヘサルヘキ
手筈ヲ整ヘ居タルコトモ亦明白ニテ假令右通告カ技術上ノ手違
ヒヨリ眞珠灣ニテ攻撃ヲ加ヘ初メタル時間ヨリモ稍々遅レタリト
雖モ我方カ右通達ヲ故意ニ遅ラセタル次第ニ非ラサルコトメ立證
セラレ得ル所ナリ

終戦後ニ於ケル米國ノ動向ニ鑑ミルニ米國政府カ「リムムバー
パールハーバー」ヲ標語トシテ米國民ノ團結ト戰意ノ昂揚ヲ圖リ
タル時期ニ比スレバ眞珠灣攻撃責任ヲ問題トスル程度ハ多少低減
シタルヤノ感アルノミナラス米國國務省編纂ニ依ル外交記録「平
和ト戦争」中ニ米國務卿ハ眞珠灣攻撃ノ可能性ニ付テハ既ニ
和十六年一月末ニ情報ヲ入手シ居ルノミナラズ十一月二十九日

國大使トノ協議ノ際ニ問題ハ既ニ陸海軍ノ手ニ移サレタルコト及
眞珠灣攻撃ノ可能性アルコトヲ語リタル旨明記セラレ居ル點等ニ
モ鑑ミ眞珠灣ニ對スル攻撃ハ當時ノ客觀的情勢ニ鑑ミ米國ニトリ
テモ必ズジモ奇異トスルニ當ラザリシ實情トナリシモノト認メラ
ルル次第ナリ

事情斯クノ如クナルヲ以テ米側ハ基本的動向トシテハ寧ロ今後ハ
日本ヲ開戦ニ導キタル主觀的及客觀的原因ノ探究ニ重點ヲ置クニ
非ラズヤト推察セラレル次第ニモ鑑ミ我方トシテハ日米戦争直前
ノ事態乃至近因ニ關シテハ自衛權ヲ援用シテ説明スヘキモノナル
モ戦争ニ至リタル遠因ニ關シテハ客觀的、世界史的事實ニ立脚シ、
移民制限乃至禁止法令、支那ノ條約違反、排日、排日貨、「オツ
タワ」會議以後ニ於ケル通商障壁ノ増嵩等カ國土狹小、資源貧弱
人口膨大ナル日本民族ノ生存權ヲ脅スニ至リタルコトカ戦争原因

ニシテ右ハ當時キ日本ノ國內事情トモ對照シ正當ナル解釋ナル所
以テ強調シ併セテ尙最近ノ日本民族生存權確保ヘノ伏線トナスヘキ
モノト思考ス尙最近十年間ノ世界政治ニ於ケル世界觀ノ相剋モ亦
間接ニ日本國民ノ現状打破的意識ノ昂揚ニ資シタルハ事實ニシテ
右ハ之ニ乘ジタル一部ノ政治勢力ノ抬頭セル點ト共ニ卒直ニ之ヲ
是認シ支障ナカルヘク又戰爭目的ニ關シテハ日本民族ノ自存自衛
ノ爲ノ巨ムニムマレザルニ出デタル次第ナルモ緒戰ノ好況ニ伴ヒ
東亞ノ被抑壓民族ノ解放ヲ目指ス解放者戰爭ニ移行シ目前カ自存
自衛ト真ニ解放トノ二者ニ指向セララルニ至リタルコトハ右二者
ハ究局ニ於テハ分離シ得ザルモノナリシコトヲ確認シ其支ナカル
ヘシ

一、日米交渉打切りノ通告ニ關スル件
 十二月一日午前會議ニ於テ
 十一月五日決定ノ帝國國策遂行要領ニ基ク對米交渉ハ遂ニ成立
 スルニ至ラズ
 帝國ハ米英蘭ニ對シ勝戰ス
 トノ決定ヲ見タリ而シテ勝戰ニ先ダツ外交措置等ニ付テハ其ノ際
 ハ何等ノ決定ナカリシモ當時軍部特ニ海軍統帥部ニ於テハ劣勢ナ
 ル我海軍力ヲ以テ優勢ナル米國海軍力ト戰フニハ先ツ奇襲ニ依リ
 米國艦隊ニ決定的打撃ヲ與フルコト絕對ニ必要ナリトノ陣田ヲ以
 テ奇襲ノ成功ヲ期センカ爲勝戰ニ至ル迄對米交渉ヲ繼續センコト
 ヲ主張シ且自衛行動ナルカ故ニ國際法ヨリ見ルモ何等事前ノ通告
 ヲ必要トセストノ說唱ヘラレ居リタリ右ニ對シテ外務大臣ハ事前
 通告ノ必要ヲ強調シ(評一)折衝ノ未十二月五日外務大臣ハ其ノ
 旨邸ニ於テ參謀次長及軍令部次長ト會見懇談ノ結果交渉打切りニ

外務省

關スル電報案及戰術行爲開始前野村大使ヨリ之ヲ米國政府ニ進達
 セシムルコトニ付兩者ノ同意ヲ取付ケ且右進達ノ時刻ヲ華府時間
 七日午後一時トスルコトニ打合セタリ(評二)
 (評一)是ヨリ野村村來函兩大使ハ十一月二十六日ノ米國案ヲ
 報告スルニ當リ「彼我ノ主張ハ懸隔甚大ニシテ所要期日迄
 ニ我方主張ヲ貫徹スルコト到底見込ナキニ至レル處我方ハ
 今日迄急進妥結ヲ再三迫リタルモ未タ最後通牒的意思表示
 ハ爲シ得ラズ從テ若シ帝國ガ交渉打切りノ手續ヲ執ラズシ
 テ突如トシテ自由行動ニ出ツルニ於テハ米國ハ帝國ガ交渉
 ヲ謀略手段ニ利用シ戰術準備ノ成ル迄米國ヲ引指リ用意成
 ルヤ交渉繼續中ニ拘ラス恣ニ謀定ノ軍事行動ヲ開始セリト
 ノ趣旨ヲ以テ惡宣傳ヲ行フコト必定ナルニ付大國トシテノ
 信義保持ノ見地ヨリモ帝國トシテハ在米國大使ニ對スル
 通告又ハ中外ニ對スル聲明等然ルベキ方法ヲ以テ先ツ交渉

外務省

打切りノ意思表示ヲ爲スコトトシ其ノ場合ニハ東京及華府ニ於テ同時ニ手續ヲ取ルコトトシ廢シトノ意見ヲ上申シ居レリ

(註)一 通告ノ時間ハ以上ノ経緯ニテ決定セラレタルモ眞珠灣攻撃ノ計畫及右作戰ノ時刻ハ軍部ノ少數關係者ノミガ承知シ居リタルモノニシテ外務大臣乃至餘官モ當時之ヲ聞知シ居ラス

外務省

S 1.7.0.0-13

82

二、覺書通達遲延事情

イ、東京ニ於ケル發電状況

日米交渉打切りノ覺書及其ノ歸條訓令ハ十二月六日夜ヨリ翌七日朝ニ亘リ左ノ順序ニ依リ外務省ヨリ在華府大使館宛ニ發電セラレタリ

(一) 覺書打電ノ豫

在米野村大使宛

東郷外務大臣

第九〇一號

一 政府ニ於テハ十一月二十六日ノ米國提案ニ付慎重議ヲ請フタル結果別電第九〇二號ノ對米覺書(英文)ヲ決定セリ

二 右別電ハ長文ナル歸條モアリ全部(十四節)ニ分御打電スベシトテ受セラレハ明日トナルヤモ知レザルモ刻下ノ情勢ハ俄メテ變換ナルモノアルニ付右御受領相成リタルコトハ差當リ候

秘ニ附セラルル事致サレ度シ

外務省

S 1.7.0.0-13

83

右覺督ヲ米岡ニ提出スル時期ニ付テハ追テ別ニ電報スベキモ
右別電接到ノ上ハ訓令次第何時ニテモ米岡ニ手交シ得ル儘文
書ノ整理其ノ他機メ万端ノ手配ヲ了シ置カレ度シ
右電信ハ東京時十二月六日午後八時三十分(華府時十二月六日
午前六時三十分)ニ發電セラレタリ(註一)

□覺督ノ本文

本文ハ十四部ニ分割シM K Y及R C Aノ兩路線ヲ交互ニ用ヒ第
一部ヨリ順次ニ三十分毎(即チ各線一時間毎)ニ一通電打電セ
ラレタリ

最初ノ十三本ハ東京時十二月六日午後八時三十分(華府時十二
月六日午前六時三十分)ヨリ發電開始セラレタリ仍テ第十三本
目ノ發電時刻ハ三十分ニ一週ノ割合トスレバ東京時十二月七日
午前二時三十分(華府時十二月六日午後零時三十分)ナリ
第十四本目即チ最終部ハ東京時十二月七日午後四時(華府時十

外務省

二月七日午前二時)ニ發電セラレ居レリ
(三)覺督消息時刻ノ訓令

在米野村大使宛

東郷外務大臣

第九(四)號(大至急)

任第第九(一)號ニ關シ

本件對米覺督七日午後一時ヲ期シ米岡ニ(成ル可ク)國務長官ニ
實大使ヨリ直接御手交アリ度シ

右電信ハ東京時十二月七日午後五時三十分(華府時十二月七日
午前三時三十分)ニ發電セラレタリ

(四)其ノ他ノ電報

以上ノ電報ト相前後シテ「英帝獨逸防止ノ見地ヨリ覺督ノ作成
ニタイピストラ用ヒザルヨウ指令」「覺督字句ノ訂正」「東京
時十二月七日午後七時二十分華府時午前五時三十分發」「野村
來函函大使及大使副員ニ對スル大臣ノ感謝ノ辭」等打電セラレ

外務省

タリ

(註一) 發電時間ハ外務省電信原本ニ記入ノモノニ依ル以下之
ニ同ジ東京中央電信局ニ對スル外務省電信室ノ實際上
ノ發電時ハ右原本記入ノ時刻ヨリ三十分乃至一時間程
度遅レ居ルモノノ如シ又當時太平洋地域ノ電信連絡狀
態ハ良好ニシテ東京ヨリ華府ヘノ通過所要時間ハ凡ソ
三十分乃至一時間ナリシ由ナリ

在華府大使館發電狀況

大使館ニテハ上述(一)ノ電信ハ十二月六日午前中ニ接到□ノ本文
ハ同日正午頃ヨリ引續キ接到シ午後十一時頃迄二十三本目迄ハ全
部解讀了了シ係員ハ最後ノ部分タル第十四本目ノ到着ヲ待ツ爲メ
朝三時頃迄居残りタルモ其ノ間ニ接到セズ(註一)
的テ翌七日朝登陸後右ヲ解讀且譯寫シタル爲爾々時間延シ(註
二)野村大使カ「ハル」校目ニ之ヲ手交セルハ訓令指示ノ時刻ヨ

外務省

S 1.7.0.0-13

86

リ約一時間遅ルルコトナリタリ

(註一) 本電ハ十二月七日午前七時頃迄二人電報ニ配送セフレ居
タルモノノ如シ

(註二) 七日大使館電信係員ハ午前九時頃出勤シタル由ナルカ覺
得ノ辭職停當ノ遅レタル理由ノ一ハ訓令ニ従ヒ素人ノ手ニテ「
タイプ」シタル爲ノ事前ニ因ルモノナルベシ尙十四本目ノ電信
ニハ本省ニテ發電ノ際大モ急ノ指示配送シ居リタル爲メ入電係
員ハ受領ノ際之ヲ電報ノ本文ニ非サル爲メ電報ト誤ヒ解讀ヲ受
カザリシ爲メ延シタリトノ説アリ且當日本省ヨリ打電セル電
信校印死亡セル爲メ配送ムル能ハズ

外務省

S 1.7.0.0-13

87

三、覺書ノ性質

本覺書ハ戰闘ノ開始乃至自由行動ノ開始ヲ明示シ居ラズ從テ法律上
宣戰ノ通告タルノ性質ヲ具備スルモノト見做スコトヲ得ズ併シ乍ラ
本覺書ハ終始一貫始メテ宣戰トモ云フベキ調子ヲ以テ通便ナルヲ
照度ヲ原通シ特ニ其ノ末略ニ近ク「斯クテ日本國交ヲ調整シ合衆國
政府ト相携ヘテ太平洋ノ平和ヲ維持確立セントスル帝國政府ノ希望
ハ遂ニ失ハレタリ」ト述ベ居リ右ハ自由行動ヲ留保セル意味ヲ含マ
シタルモノトシテ（注一）日本政府ハ之ヲ以テ本國ニ對シ我方ノ宣
戰ニ關スル外交上ノ通告ニ代ヘントシタル次第ナリ右ハ
イ、我方政府ガ本覺書ノ通過ヲ訓令スルニ當リ「格ニ其ノ日守マ
指定シタルノミナラズ文書ノ字句ニ嚴密「タイピスト」ヲ使用
セザルコト等事柄ニ内容ノ調度セザル機密ヲ守ルニ至ル迄
ナル訓令ヲ發出シ居ルコト
ロ、當時ノ各報の情勢ニ於テ交渉ノ打切りハ日米間ノ電報ヲ通ス

外務省

ノ公報ナリシコトハ兩國當事者ニ於テ充分感知シ居リタルコト（註二）

ヲ以テ傍證トスルコトヲ得
尙右ニ關シ日本交渉ハ日本側ガ作中準備ヲ終成スル爲ノ純然タル
欺騙行爲ナリトノ見解ハ事實ニ符合セズ十一月二十六日米國覺書到
達迄日本ハ或ル程度ノ軍事準備ヲ整フル一面ニ於テ外交交渉成立ニ
努力シ交渉成立ノ際ハ作戦行動ニ出ヅルノ意圖ナカリシコト當時ノ
脚稿文書乃至ハ註本大使宛訓令等ニ依ツテ之ヲ立證シ得ル次第ニ
シテ（註三）日本政府ハ前記米國政府覺書ノ到達ニ依リ交渉成立ノ
見込ナシト判定スルヤ兎モ由モ作戦行動具現前ニ外交手段ニ依リ交
渉打切ヲ宣シ行動ノ自由ヲ留保セントノ意圖ノ下ニ本覺書ヲ發出セ
ルモノナリ而シテ實際上ハ電信解讀ガ遅延シ本覺書ハ攻撃開始直後
對手方ニ手交セラルル結果トナリタルモ右ハ純然タル事務上ノ通達
ニ斯クモノナルコト訓令ノ通りナリ

外務省

以上ヲ要約スルニ本覺悟ハ宣戦ニ臨スル海牙條約上ノ我方責任ヲ解
消スルノ資料タリ得ザルモ(註四)政治的見地ヨリ「眞珠灣圍封」
ノ非難ニ對スル實質的證明資料タリ得ベシ
英國政府ニ對シテハ宣戦通告ヲ行フ手續ヲ執リ居ラス政治的證明ト
シテハ交渉ノ直接相手ガ米國ナリシコト、對米通告ハ直ニ英米ニ轉
報セフルル情勢ニ在リタルコトヲ援用シ得ベシ英印攻撃ハ後日ノ事
ニ關スルヲ以テ蘭國政府ニ對スル關係ニ於テハ此ノ點ノ問題ヲ生
ス

(註一)外務當局ニ於テハ此ノ字句ハ自由行動ヲ留保スル意味ヲ
含ムモノトシテ起草セラレタリ
(註二)ロハート・コミツション・リポート等米艦備文書ニ依ル
モ十一月二十六日米艦ハ最後通報案トモ見做リ居リ現「ハ
ル」長官ハ兵ノ直後陸海兩長官ニ對シ「米艦」ハ終止セリト
語り居リ又同長官ト陸海首領部ノ間ニハ不斷ノ連絡アリテ陸

外務省

海統帥部ヨリ布哇ノ陸海司令官宛ニ作戦行動ヲ開始スルニ必
要ナル措置ヲ執ルベキ秘密命令發出セラレ居タルコト等ノ事
實アリ
(註三)例ヘハ十一月二十七日決定ノ「會談成功ノ際ノ陸海協
働」ノ如キ其一證ヲナリ
(註四)眞珠灣攻撃ハ日露ノ行動ナルガ如ク直戰ヲ要セストノ説
ハ一種ノ政治論ニシテ法律論トシテハ成立セズ又劣勢ノ海軍
力ヲ以テ優勢ノ海軍力ニ對抗スル爲ニハ奇襲以外ニハ方法ナ
シトノ辯明モ亦宣戦ノ法律上ノ責任ヲ解消セシムルモノニア
ラズ

外務省

1. 日米交渉打切り通告 = 閣スル件

S 1.7.0.0-13 92

103

上記文書は全ク同じもの2部あり

ので、要請に基づき、本局法規課の

川端事務官に1部差し上げました

39.12.29

山田

外務省

REEL No. A-1076

0342

アジア歴史資料センター

26/10
1

「帝國政府ハ「アメリカ」合衆國政府トノ間ニ友好的の諒解ヲ遂ケ兩國共同ノ努力ニ依リ太平洋地域ニ於ケル平和ヲ確保シ以テ世界平和ノ招來ニ貢獻セントスル眞摯ナル希望ニ促シ本年四月以來合衆國政府トノ間ニ兩國國交ノ調整増進並ニ太平洋地域ノ安定ニ關シ誠意ヲ傾倒シテ交渉ヲ繼續シ來リタル處過去八月ニ亘ル交渉ヲ通シ合衆國政府ノ固執セル主張並ニ此間ニ衆國及英帝國ノ帝國ニ對シ執レル措置ニ付茲ニ率直ニ其ノ所信ヲ合衆國政府ニ開陳スルノ光榮ヲ有ス

ニ東亞ノ安定ヲ確保シ世界ノ平和ニ寄與シ以テ萬邦ヲシテ各其ノ所ヲ得シメントスルハ帝國不動ノ國是ナリ曩ニ中華民國ハ帝國ノ眞意ヲ解セス不幸ニシテ支那事變ノ發生ヲ見ルニ至レルモ帝國ハ平和克復ノ方途ヲ講スルト共ニ戰禍ノ擴大ヲ防止センカ爲終始盡善

S 1.7.0.0-13

104

2

ノ努力ヲ致シ來レリ客年九月帝國カ獨伊兩國トノ間ニ三國條約ヲ締結シタルモ亦右目的ヲ達成センカ爲ニ外ナラス然ルニ合衆國及英帝國ハ有ラユル手段ヲ竭シ重慶政權ヲ援助シテ日支全面和平ノ成立ヲ妨碍シ東亞ノ安定ニ對スル帝國ノ建設的勢力ヲ控制セルノミナラス或ハ蘭領印度ヲ牽制シ或ハ佛領印度支那ヲ脅威シ帝國ト此等諸地域トカ相携ヘテ共榮ノ理想ヲ實現セントスル企圖ヲ阻害セリ殊ニ帝國カ佛國トノ間 締結シタル議定書ニ基キ佛領印度支那共同防衛ノ措置ヲ講スルヤ合衆國政府及英國政府ハ之ヲ以テ自國領域ニ對スル脅威ナリト曲解シ和蘭國ヲモ誘ヒ資產凍結令ヲ實施シテ帝國トノ經濟斷交ヲ敢テシ明カニ敵對的態度ヲ示スト共ニ帝國ニ對スル軍備ヲ增強シ帝國包圍ノ態勢ヲ整ヘ以テ帝國ノ存立ヲ危殆ナラシムルカ如キ情勢ヲ誘致スルニ至レリ右ニ拘ラス帝國總理大臣ハ本年八月事態ノ急速收拾ノ爲合衆國大統領ト會見シ兩國間ニ存在スル太平洋全般ニ亘ル重要問題ヲ討議檢討センコトヲ提議セリ然ルニ合衆國政府ハ右申入ニ主讓上賛同

S 1.7.0.0-13

105

ヲ與ヘ乍ラ之カ實行ハ兩國間重要問題ニ關シ意見一致ヲ見タル後トスヘシト主張シテ譲ラス

仍テ帝國政府ハ九月二十五日從來ノ合衆國政府ノ主張ヲモ充分考慮ノ上米國案ヲ基礎トシ之ニ帝國政府ノ主張ヲ取入レタル一案ヲ提示シ論議ヲ重ネタルカ双方ノ見解ハ容易ニ一致セサリシヲ以テ現内閣ニ於テハ從來交渉ノ主要難點タリシ諸問題ニ付帝國政府ノ主張ヲ更ニ緩和シタル修正案ヲ提示シ交渉ノ妥結ニ努メタルモ合衆國政府ハ終始當初ノ主張ヲ固執シ協調的態度ニ出テス交渉ハ依然滯滞セリ茲ニ於テ十一月二十日ニ至リ帝國政府ハ兩國間交渉ノ破綻ヲ回避スル爲最善ノ努力ヲ盡ス趣旨ヲ以テ樞要且緊急ノ問題ニ付公正ナル妥結ヲ圖ル爲前記提案ヲ簡單化シ(一)兩國政府ニ於テ佛印以外ノ南東亞細亞及南太平洋地域ニ武力進出ヲ行ハサル旨ヲ確約スルコト(二)兩國政府ニ於テ其ノ必要トスル物資ノ獲得カ保障セララルル様相互ニ協力スルコト(三)兩國政府ハ相互ニ

通商關係ヲ資產凍結前ノ狀態ニ復歸スルコト、合衆國政府ハ所要ノ石油ノ對日供給ヲ約スルコト(四)合衆國政府ハ日支兩國ノ和平ニ關スル努力ニ支障ヲ與フルカ如キ行動ニ出テサルコト(五)帝國政府ハ日支間和平成立スルカ又ハ太平洋地域ニ於ケル公正ナル平和確立スル上ハ現ニ佛領印度支那ニ派遣セラレ居ル日本軍隊ヲ撤退スヘク又本了解成立セハ現ニ南部佛領印度支那ニ駐屯中ノ日本軍ハ之ヲ北部佛領印度支那ニ移駐スルノ用意アルコト等ヲ内容トスル新提案ヲ提示シ同時ニ支那問題ニ付テハ合衆國大統領カ曩ニ言明シタル通日支間和平ノ紹介者ト爲ルニ異議ナキモ日支直接交渉開始ノ上ハ合衆國ニ於テ日支和平ヲ妨礙セサル旨ヲ約センコトヲ求メタルカ合衆國政府ハ右新提案ヲ受諾スルヲ得スト爲セルノミナラス援蔣行爲ヲ繼續スル意思ヲ表明シ次テ更ニ前記ノ言明ニ拘ラス大統領ノ所謂日支間和平ノ紹介ヲ行フノ時機猶熟セズトテ之ヲ撤回シ遂ニ十一月二十六日ニ至リ偏ニ合衆國政府カ從來固執セル

原則ヲ強要スルノ態度ヲ以テ帝國政府ノ主張ヲ無視セル提案ヲ爲
スニ至リタルカ右ハ帝國政府ノ最モ遺憾トスル所ナリ
四 抑本件交渉開始以來帝國政府ハ終始専ラ公正且謙抑ナル態度ヲ以
テ銳意妥結ニ努メ屢難キヲ忍ビテ能フ限リノ讓歩ヲ敢テシタルカ
交渉上重要事項タリシ支那問題ニ關シテモ協調的態度ヲ示シ合衆
國政府ノ提唱セル國際通商上ノ無差別待遇原則遵守ニ付テハ本原
則ノ世界各國ニ行ハレシコトヲ希望シ且其ノ實現ニ順應シテ之ヲ
支那ヲモ含ム太平洋地域ニ適用スル様努力スヘキ旨ヲ表明シ尙支
那ニ於ケル第三國ノ公正ナル經濟活動ハ何等之ヲ排除スルモノニ
アラサルコトヲモ闡明セルカ更ニ佛領印度支那ヨリノ撤兵ニ付テ
モ情勢緩和ニ資スルカ爲前記ノ如ク南部佛領印度支那ヨリノ即時
撤兵ヲ進シテ提議スル等極力妥協ノ精神ヲ發揮セルハ合衆國政府
ノ夙ニ諒解スル所ナリト信ス
然ルニ合衆國政府ハ常ニ理論ニ拘泥シ現實ヲ無視シ其ノ抱懷スル

非實際的の原則ヲ圖説シテ何等讓歩セス徒ニ交渉ヲ遷延セシメタル
ハ帝國政府ノ諒解ニ苦ム所ナルカ特ニ左記諸點ニ付テハ合衆國政
府ノ注意ヲ喚起セサルヲ得ス
(一) 合衆國政府ハ世界平和ノ爲ナリト稱シテ自己ニ好都合ナル諸原
則ヲ主張シ之カ採擇ヲ帝國政府ニ迫レル處世界ノ平和ハ現實ニ
立脚シ且相手國ノ立場ニ理解ヲ持シ相互ニ受諾シ得ヘキ方途ヲ
發見スルコトヲ依リテノミ具現シ得ルモノニシテ現實ヲ無視シ
一國ノ獨善的主張ヲ相手國ニ強要スルカ如キ態度ハ交渉ノ成立
ヲ促進スル所以ノモノニアラス
今般合衆國政府カ日米協定ノ基礎トシテ提議セル諸原則ニ付テ
ハ右ノ中ニハ帝國政府トシテ趣旨ニ於テ贊同ニ吝ナラサルモノ
アルモ合衆國政府カ直ニ之カ採擇ヲ要望スルハ世界ノ現状ニ鑑
ミ架空ノ理念ニ驅ラルルモノト云フノ外ナシ
尙日、米、英、支、蘇、露、七國間ニ多邊的交渉ヲ締

結スルノ案ノ如キモ、是ニ集團的平和機構ノ舊構想ヲ追フノ結果、東亞ノ實情ト遊離セルモノト去フノ外ナシ。

(二) 合衆國政府今次ノ提案中ニ「兩國政府カ第三國ト締結シ居ル如何ナル協定モ本取極ノ根本目的タル太平洋全域ノ平和確保ニ才盾スルカ如ク解釋セラレサルコトニ付合意ス」トアルハ即チ合衆國カ歐州戰爭參入ノ漏合ニ於ケル帝國ノ三國條約上ノ義務履行ヲ牽制セントスル意圖ヲ以テ提案セルモ、是ト謀メラルルヲ以テ右ハ帝國政府ノ受諾シ得サル所ナリ。

由來合衆國政府ハ其ノ自己ノ主張ト理念トニ眩惑セラレ自ラ戰爭擴大ヲ企圖シツツアリト謂ハサルヲ得ス。合衆國政府ハ一方太平洋地域ノ安定ヲ策シ自國ノ背後ヲ安固ト爲シツツ他方英帝國ヲ援ケ歐州新秩序建設ニ邁進スル獨伊兩國ニ對シ自衛權ノ名ノ下ニ進ンテ攻撃ヲ加ヘントスルモノナルカ右ハ太平洋地域ニ平和的手段ニ依リ安定ノ基礎ヲ築カントスル幾多ノ原則的主張ト

全然矛盾背馳スルモノナリ。

(三) 合衆國政府ハ其ノ固執スル主張ニ於テ武力ニ依ル國際關係處理ヲ排撃シツツ一方英帝國等ト共ニ經濟力ニ依ル壓迫ヲ加ヘツツアル處斯ル壓迫ハ場合ニ依リテハ武力壓迫以上ノ非人道的行爲ニシテ國際關係處理ノ手段トシテ排撃セラレヘキモノナリ。

(四) 合衆國政府ノ意圖ハ英帝國其ノ他ノ諸國ヲ誘引シ支那其ノ他東亞ノ諸地域ニ對シ其ノ從來保持セル支配的地位ヲ維持強化セントスルモノト見ルノ外ナキ。東亞諸國カ過去百有餘年ニ亘リ英米ノ帝國主義的搾取政策ノ下ニ現狀維持ヲ強ヒラレ兩國繁榮ノ犧牲タルニ甘ンセサルヲ得サリシ歴史的事實ニ鑑ミ右ハ萬邦ヲシテ各其ノ所ヲ得シメントスル諸國ノ根本國策ト全然背馳スルモノニシテ帝國政府ノ斷シテ容認スル能ハサル所ナリ。

合衆國政府今次提案中佛領印度支那ニ關スル規定ハ正ニ右態度ノ適例ト稱スヘク佛領印度支那ニ關シ佛國ヲ除キ日、米、英、

蘭、支、泰六國間ニ同地域ノ領土主權ノ尊重並ニ貿易及通商ノ均等待遇ヲ約束セントスルハ同地域ヲ六國政府ノ共同保障ノ下ニ立タシメントスルモノニシテ佛國ノ立場ヲ全然無視セル點ハ曾ク措クモ東亞ノ事態ヲ紛糾ニ導キタル最大原因ノ一タル九國條約類似ノ體制ヲ新ニ佛領印度支那ニ擴張セントスルモノト觀ルヘキモノニシテ帝國政府トシテ容認シ得サル所ナリ

(四)合衆國政府カ支那問題ニ關シ帝國ニ要望セル所ハ或ハ全面撤兵ノ要求ト云ヒ或ハ通商無差別原則ノ無條件適用ト云ヒ何レモ支那ノ現實ヲ無視シ東亞ノ安定勢力タル帝國ノ地位ヲ覆滅セントスルモノナル處合衆國政府カ今次提案ニ於テ重慶政權ヲ除ク如何ナル政權ヲモ軍事的政治的且經濟的ニ支持セサルコトヲ要求シ南京政府ヲ否認シ去ラントスル態度ニ出テタルハ交渉ノ基礎ヲ根柢ヨリ覆スモノト云フヘク右ハ前記援蔣行爲停止ノ拒否ト共ニ合衆國政府カ日支間ニ平常狀態ノ復歸及東亞平和ノ回復ヲ

阻害スルノ意思アルコトヲ實證スルモノナリ

五 要之今次合衆國政府ノ提案中ニハ通商條約締結、資産凍結令ノ相互解除、圓弗爲番安定等ノ通商問題乃至支那ニ於ケル治外法權撤廢等本質的ニ不可ナラサル條項ナキニアラサルモ他方四年有餘ニ亘ル支那事變ノ犧牲ヲ無視シ帝國ノ生存ヲ脅威シ權威ヲ冒瀆スルモノアリ從テ全体的ニ觀テ帝國政府トシテハ交渉ノ基礎トシテ到底之ヲ受諾スルヲ得サルヲ遺憾トス

六 尙帝國政府ハ交渉ノ急速成立ヲ希望スル見地ヨリ日米交渉妥結ノ際ハ、英帝國其ノ他ノ關係國トノ間ニモ同時調力ヲ提議シ合衆國政府モ大体之ニ同意ヲ表示セル次第アル處合衆國政府ハ英、露、蘭、重慶等ト屢協議セル結果特ニ支那問題ニ關シテハ重慶側ノ意見ニ迎合シ前記諸提案ヲ爲セルモノト認メラレ右諸國ハ何レモ合衆國ト同シク帝國ノ立場ヲ無視セントスルモノト斷セサルヲ得ス

七 惟フニ合衆國政府ノ意圖ハ英帝國其ノ他ト苟合策動シテ東亞ニ於

ケル帝國ノ新秩序建設ニ依ル平和確立ノ努力ヲ妨碍セントスルノ
 ミナラス日支兩國ヲ相闘ハシメ以テ英米ノ利益ヲ擁護セントスル
 モノナルコトハ今次交渉ヲ通シ明瞭ト爲リタル所ナリ斯クテ日米
 國交ヲ調整シ合衆國政府ト相携ヘテ太平洋ノ平和ヲ維持確立セン
 トスル帝國政府ノ希望ハ遂ニ失ハレタリ
 仍テ帝國政府ハ茲ニ合衆國政府ノ態度ニ鑑ミ今後交渉ヲ繼續スル
 モ妥結ニ達スルヲ得スト認ムルノ外ナキ旨ヲ合衆國政府ニ通告ス
 ルヲ遺憾トスルモノナリ

